「産まない」時代の女たち

チャイルド・フリーという生き方

Will You Be Mother?

ジェーン・バートレット［著］

［評者］青柳 いづみこ

ピアニスト・文筆家

遠藤公美恵訳、とびら社発行、新曜社発売・298ページ・2520円／Jane Bartlett 63年生まれ。英のジャーナリスト。

「選択の自由」があるから揺れ動く心

母性をめぐる問題が複雑化している。「お子さんはまだ？」の質問にうんざりする既婚女性、タイムリミットにせかされる未婚女性。子どもができない女性は不妊治療の選択に悩み、避妊に失敗した女性は子どもがキャリアの障害になったと感じ、子どもを持つ専業主婦は、社会的疎外感に悩んでいるかもしれない。

本書は、産まない決心をした約五十名のイギリス女性へのインタビューにもとづいている。女性の権利を声高に主張したり、母親の役割を過小評価したりする内容ではない。彼女たちは、職業も年齢も、子どもを持たない理由もさまざまだ。経済問題、仕事、健康。母親に虐待されたため、自分の子どもにくり返すことを恐れる女性もいる。いずれも揺れ動く心境を素朴に語っていて、その選択に必ずしも同意できない私も心打たれた。

イギリスでは、一九八九年に男女あわせた不妊手術がピルの服用を上回ったという話にも驚かされた。八〇年代初期にかけて、ピルの安全性に対する不安が高まったという。もっとも、原書は十年前の刊行なので、いささか情報が古い。

母親にならなかったことを全く後悔していない女性は稀だ。何かを失ったのではないかと思う部分はある。でも、何千人もの女性が、「なにかを失おうとしているのかもしれないという思いに駆られて」子どもを産んだのかもしれない。

底に流れているのは、女性は子どもを産みたいはずだという前提への疑問である。「どうして子どもを産んだの？」という問いが発せられることはまずない。産まない女性を称する言葉もないが、著者はチャイルド・フリーと呼んでいる。

名前がついても、揺れ動く気持ちにかわりはない。チャイルド・フリーを選択したにもかかわらず、「そのほうが楽なために」わざと不妊を口実にする女性。かと思えば、望みさえすれば産めたと発言して、自分の女性性を強調する女性。

三人の子どもの母親である訳者が述べているように、「自由という両刃の剣」を与えられた女性たちは、「選択の自由」を持たなかった時代とはまた違った意味の葛藤に苦しんでいるのだ。